

『単一民族神話の起源』

小能英二著
(新曜社)

「日本は単一民族だから」

カナダやアメリカとの違いを説明するとき、しばしば出てくる主張だ。在日韓国・朝鮮人、アイヌなどもいるし、同じ「日本人」の間にもお互いに通じない方言もあつたりするのだから、かなり雑な論法と言わざるをえない。

日本に定住する外国人が増え、芥川賞候補になったり、帰化して選挙に出馬したりする今、この「単一民族神話」をそろそろ克服しないといけないだろう。

しかし、根が深い。明治時代

以来、日本人は「単一民族」という自画像をずっと保ち続けてきたのだからと漠然と信じてきた私は、この本に出合ってから目からうろこが落ちる思いだった。定説を覆してくれる本ほど痛快な読み物はない。

戦前の大日本帝国は、台湾と朝鮮を併合して多くの非日系人をかかえ、紛れもない多民族帝国だったのだ。

そして、著者が多くの思想家を取り上げ、豊富な資料をひもとき、歴史学、社会学両面から

私の一冊

イアン・アーシー

日本人の自画像覆す痛快さ

鮮やかに論証するように、多民族帝国にふさわしいイデオロギ―が定着していた。日本人は混同民族で、それゆえ異民族を同

化する能力に優れている。



日本を家族国家ととらえながらも、

帝国に取り込まれた異民族を「養子」と位置づける。

単一民族神話はむしろ、戦後、日本が台湾・朝鮮半島を手

放して国内の少数民族が激減してから一般化したのだ。

一見不変なものでありそうな民族のアイデンティティーは、実は歴史の転換期を迎え、意外と流動的になる。

今日、日本は再び岐路に立たされている。これを機に、他者を排除する、または他者に対する優位性を正当化するあらゆる「民族神話」を乗り越え、日本人が、その者を自然体で受け入れる寛容な民主的社會を築いていければと、本書を読んでつくづく思った。

(翻訳家)